

(2) 船上生活者のオーラルヒストリー (二)

語り手：田上キサ子（元・船上生活者）

1942年1月15日生

清水善治（元・機帆船乗組員）

聞き手：田上繁、森武磨、藤川美代子

新垣夢乃、近石哲、平田茉莉子

同 席：田上亘、田上實

聞き取り日：2011年8月2日

場 所：田上亘宅（若松区今光）

船上生活の危険性

田上亘：それで、航海しよるときは、もうどっか道中、急病になったときは、死んだ、死なんいけん。急病、連絡とれんけえ。救急車なんかないし、道中ないし。そういう危険性っちゅうもんがあったんやないか。

キサ子：危険性はもの凄くあるんですよ。

田上亘：その中に、やっぱり。

田 上：いや、さっきね、2人、おふたりから聞いたんだけど。やっぱり、弟さんと妹さんを小学校前に亡くしてたって。つまり、海に落っこって。

キサ子：わたしなんかも、落ちましたよ、1人、亡くなったんです。

田 上：1人亡くなったの、誰？

キサ子：あの一、1番下。

田上亘：ミチノリ。

キサ子：ミチノリっちって。

田 上：えっ、3番目の男の子いたの？

田上亘：兄の、おんなし名前をつこうたの？ いっぺん。ミチノリっちゅうんが2番目かのう？ ヒロミの、長男かな？ 長男が。

キサ子：5番目よ。だから、わたしがあって、ほいで弟が。

田上亘：いや。すぐ死んだミチノリは。初代ミチノリは。

キサ子：あれはね。

田上亘：あれは長男やなかったか。

キサ子：違う。あれはね、あれはトキコの下だから、ちょっと待ってね。数えんと。

田上亘：トキコの下やったら、四男やないか。

キサ子：5、5、5。そう。

田上亘：なら、それが死んで、すぐがミチノリになったの？

キサ子：そう、そう、そう、そう。

田 上：5人子供生まれて。

キサ子：6人。

田 上：6人兄弟だったの？

キサ子：6人兄弟。

田 上：6人兄弟、まあ長女やろ？

田上亘：うん、長女。

田 上：ほいで、下の男の子が？ ヒロミ？

田上亘：ヒロミ。

キサ子：3人と。

田上亘：ミツヒロ。それから、ミチノリっちゅうんが、今おるけど、そのミチノリっちゅうんが [] のうちの、その4つぐらいで死んだの。だから、5つ？

キサ子：そう、4つぐらい。

田 上：じゃあ、男の子4人生まれた訳？

田上亘：そう、そう、そう、そう。

キサ子：男の子4人と。

田 上： それで、ミチノリっちゅう人があれで。

キサ子： 船であれして。

田 上： で、最後に生まれた子にミチノリって付けたわけね。どういう？

キサ子： 落ちた訳ね。その上を、あのなんていうんですかね、モーターのあれする伝馬船みたいなのに、パーッちて巻き込まれて、ほで、沈んでしもうたんです。だけど、その浮き上がってきたら、もう助かったんやけど、気が付かなかった。浮き上がったところに来て、モーターで、またブーッちて、下に、今度は下に深く沈めてしもうて、ほいで、浮き上がったときは、もう。

森： 何歳ですか、何歳で亡く…？

キサ子： 4歳ぐらいで。

森： 4歳？

キサ子： はい。だから、もうあと2年ぐらいしたら、もう兄ちゃんたちとかね、あんなところに、上にオカ（陸）に上がられるけど、オカにね。学校行かれると喜んどったんですけどね。そういう状態で。そして、もう「どうしても男の子が欲しいから」っちて、ほして、年いってから、もう1人、あの弟。

田 上： あ、そう。いやあ、たいがい1人、1軒で1人ぐらい、命失ってるねえ。

キサ子： そう。落ちてですね。

田 上： ねえ、こんなに多いとはね。

藤 川： その弟さん、お墓とかはどうしたんですか。

キサ子： お墓とかは、今熊本にあります。

森： あの住所は分かったんだけど、本籍って、やっぱり熊本にずーっとあるんですか、本籍？

キサ子： 本籍はあります。

近 石： 移してなくて？ 本籍は。

田上亘： 本籍っていうのは、あなたは、ほれ、一緒になったから、本籍まで見らんやった

(笑う)。

キサ子： (笑う)。そう、ありますよ、あすこに、今でも、本籍と今おるところとあれやから、えっと。

田上實： 現住所と本籍とは違うよ。自分が生まれたところや、本籍は。

キサ子： うん、うん、うん。わたしは熊本県の水俣市の。えっと、あそこ。

田上亘： フクロウ。

キサ子： フクロウ。フクロウに持ち家を構え、若松に来るため知人に家を貸し、若松に来てハシケに乗り、生活をした。そいで、現在もいるところはあそこ、マキノウチとかに家を借りたりして。あっち側の方に家をして、今度こっち側の方にして。

田上亘： 今はもう、こっちが本籍やからね。

帰船のため海岸から叫ぶ

森： さっきの話、ちょっと戻してあれですけど、おらぶ、叫ぶとなんか恥ずかしいってなんか、小学校5年で、戻るとき、やっぱり大きな声出すのが？

キサ子： そう。ほんだらですね、上でからですね、なんちゅうの、石炭ゴン、ゴン、ゴン、ゴンっちから、叩いて船に載せてるんですよ、あそこなんていうか。

田上亘： 栈橋からね。

キサ子： 栈橋から。ほしたら、その間をおいといて、もう、やっぱり帰りたくないと思いなながらも、やっぱり帰りたいから、大きな声で「おーい」って、船の名前呼んで、「おーい」っちいわないけん、もう、聞こえないですよ、小さいから。「おーい」で。仕舞いには、もう4回ぐらい呼んでも、全然分からないから。もう、わたし帰るっちゅって (笑う)、帰りよった。したら、おじちゃんが、「俺が呼んでやる」って、「中元さーん、あんた娘さん帰って来

とるよー」っていうて、ほいで、「あつ、
そうですかい」って、ほいで連れに来て
もらって、それやっぱ恥ずかしかったで
すね。それを中学2年になっても3年にな
っても、やらなきやいけなかったんです
よ。やっぱそれ、恥ずかしいっっちゃうか、
やっぱ嫌だったですね。

森： なかなか通じない訳ですね。しゃべって
も、なかなか。

キサ子： 通じないです。ずーっと向こうに。

田上亘： 岸壁から70～80メートルぐらい離れ
てる。

キサ子： そう、離れとる、それで、ドンガン、ド
ンガン、ドンガンやっとる。

田上亘： ただ、岸壁に着いとるんじゃないで、結
局、荷を降ろしたりするときの待ちがある
でしょう、それで、ずーっと沖にね。それ
で、あのメガホン持った人もおるっ
て。そいで、「第五若丸の、第五若丸よー」
とかいったんよな。

キサ子： そう、そう。

田上亘： そやから、苗字とかはいわんな。とか
はいわんでも、丸でいうな。「なん、なん
丸」って、自分でもこう海に遊びに行き
よったけえ、その記憶はあるけど。やっぱ。

キサ子： あのころは、やだったですよ。船には、
お父さんとか会いたいけれど、行って、
「おーい」というのは、仕様がなから、
頑張って4回ぐらいは呼ぶけど、それで
駄目だったら、はあ、近所のおじさんたち
がみんな手伝って、「待っときなよ、わし
が呼んであげるからなー」って。そう、棧
橋から。

田上： (笑う)。それは、だって、弟とかと一緒
に帰って、弟とかと待ち合わせしないの？

田上亘： いやあ、それはもう、全然そうでもね。

田上： 姉ちゃんと。

田上亘： 今みたいに、[] もないけえ。

田上： 別々に帰る訳だ。それで、当時は弟がま
たおらばれると、また迎えに行く訳ね。伝
馬でね、伝馬船でね。

田上亘： 伝馬船で行きよったよ。

キサ子： それがやっぱ一番嫌だったですね。

田上： みんないうね、女の人は。

キサ子： いっちばんいやだった。

田上亘： 女の子は確か、あれやっだろうね。おら
ばんないかんのやけえ。

キサ子： 「おーっ」て大きな声で、で、ほら、ド
ン、ドン、ドン、ドン、ドン、ほら、上で
石炭をあれしてるから、聞こえないし。も
うやめたら、あれやし、仕舞いには、ほん
と、ベそかいて。

田上亘： そりゃ、聞こえんよね、太鼓みたいな
叩いとるんじゃないけえね。

森： そういうのはわーっと [] ですか？

田上亘： そうせんなもう割れるから、声が。上で
もう太鼓みたいに叩きよる。あれを、石
炭、タンシャ（炭車）っちゅうでしよ。そ
れを上で、棧橋の上で叩きよるから。ずっ
とジョウゴに出したとき、タンシャの腹に
まだ付いとるんですよ、あれがあれに。
そいで、鉄棒みたいなので、ドーン、ド
ーンって叩いとる、鉄棒で叩くとかで、叩い
たり、ハンマーで叩きよるかどうかわらん
けど。ドーン、ドーン、ドーン、ドーンっ
て、よう聞こえよったが、夜中に、大池
（地名）のときにドーンって。あれがみん
なそうだったんよ。

田上實： あれはあれ、石炭をてつ、貨車に積ん
で。で、持ってきて、開く訳ね。

田上亘： バーンと開いたときに残るからね。

田上實： そう、そう。

田上亘： オレ見に行ったことあるで。じーっと見
よった、それもタンシャでも、セムと、あ
のセムとか、セラとか。タンシャによっ
てちごとったんよね。そいで、よう落ちるタ

ンシャと、落ちんタンシャと。セムっちゅうタンシャは落ちんと、勾配が緩いから、なかなか。そのセラっちゅうんやったかな？ で、勾配のきついやつは、さほど、流れるんだよね、やっぱ。あの栈橋から。それで。

田上實： セムのなんとかってというのは、「どんだけの石炭をこの貨車が積んどるか」っちゅうやつよ。

田上亘： 15トン貨車のね。

田 上： 列車のあれによくセムとか書いてあるよね。

田上亘： そう、あれセムっちゅうって。

田 上： あれがそのまま、こう開くの？

田上亘： 下からこう。

田 上： そうなんだよね。貨車、貨車。

田上亘： あれがガチャーンって。それで、栈橋、今いうように、聞こえんっちゅうのは、それがドーン、ドーンって、こさぎよるから。夜中も徹夜でやりよった。

田 上： 夜もやってんの？

田上亘： 二交代か、三交代で。

キサ子： で。

田上亘： じゃ、帰っても気が気じゃない、寝れないじゃない？ 夜なんかに。

キサ子： それが不思議と。

田 上： 寝れる？

キサ子： (笑う)。帰ったら。それはそこでね、屋根の上で。

田 上： 屋根の上で寝る訳ね。

キサ子： それでもう、星が見えてですねえ。寝られる。

田上亘： だから、かなり遠いところやけど、音は海やけえ、案外割れるたいね。山彦みたいにワーンとはならんけえ。

森： ふーん、ぜんぜん通じなかった。それで帰ることもあるんですか。

田上亘： そういう感じ。

キサ子： そういうことも、はい。「わーもう」っち帰るんです。

田 上： 帰るって、どこに。

森： 児童ホーム戻るんですか。

キサ子： 戻るんです。仕様がな。あとは、もう、「帰って来たんだね」って。「うん、帰って来た、聞こえんから」って。ほんとで、「すみません」っちゅうて、「おばちゃん、食事いいですか」っち。だから、食事を、もう帰るときは、「食事要らないから」っちゅうって帰るんですよ。「すみません」っちって。「もうないから」って。仕方がないから、「なんか余ってるのがあるから、それでなんか作ってあげるね」って、材料の余ったのでなんか作ってもらったりして。

森： 普段は、寂しいですね。

キサ子： だからですね (笑う)。ほんと寂しいですよ (笑う)。ほんとね、だから、やけ、結婚したらやっぱ、家族のね、ある人と思って。ところがやっぱり (笑う)、こんな人も、お父さんおらん人で、ずーっと。

田 上： 出張、出張で。

キサ子： 30何年ぐらい、おら、いなかったんですよ、ずーっと。

田 上： ふーん。じゃあ、児童ホームの話が出たんですけど、児童ホームいたころ、100人前後いたでしょ？ なんか、先ほどの人から聞いたら、100人ぐらい。

田上亘： そんなにおったろな。

田 上： 食事ゼーんぶ一緒にしてて。で。

キサ子： みんなで一斉にする。

田 上： 一斉にするのね？ それで、お風呂はもう男子が先で。

キサ子： そう。

田 上： その後は女子が。それも覚えてる？ で。

キサ子： それで、もう遊ぶ、なんちゅうんですか、あのころはピアノもあったし。なんて

いうんですか。

田上 亘： 卓球。

キサ子： 卓球でも、ああいう遊び道具はやっぱり、普通の人よりかいいのが。また、普通の家庭の人では、上流の人が持っておるぐらいの、そういうことはバレーとか、あんなんとか、なんでも遊び道具はちゃんと、あれしてあったから。そういう方面は、幸せやったです。ほいで、なんていうんですか、クリスマスとかあるときには、ちゃんとしてもらってですね。

藤 川： ケーキとか？

キサ子： ケーキとか、ちゅうたらおかしいけど、それなりの立派な、今どきの丸いこんなのとは違うけど、やっぱり、そんなのして、お菓子とかですね、サンタクロースの人が来て。

藤 川： プレゼントも？

キサ子： プレゼントもらったり。だから、そういう日常生活は結局、ぜいたくさせてもらったですね。だけど、やっぱり寂しさちゅうんはあったですよええ。なんか、帰りたいときは帰っても、帰れないときあるし（笑う）、もう。

田 上： （笑う）。帰れるとき帰るけど。それ、なんとか手立てていうか、近くにいる人、おいちゃんとか見つけて、いないの？

キサ子： おいちゃん。

田 上： おいちゃんもいないの？

キサ子： だから、事務所とか、ほたら、どうかして、知っとる人が呼んでくれることもあるけど、そんなときばっかりじゃない。そのときは、おじさんにいうのも嫌なときあった。

田 上： まあ、まあ。若い女の子の時代。

キサ子： まあ、帰ったほうがいいわと思って。

田 上： だからね、帰ったほうがいいって。

キサ子： で、帰ったらお腹空いてたまらないか

ら、「すいませーん、おばちゃん」って恥ずかしいけどいったら、「もうあんたも今ごろ帰って来て、もうご飯片付けてしまったからないよ」っちって。でも、「まだ野菜もんとか、いろいろまだ作ったのあれがあるから、それでなんか作ってあげよう」っちって。

田 上： だったら、親なんか、心配。「帰って来るのに」って、来ないから、心配はするけど、それはもう。

キサ子： いや。もう帰るって、帰って来ないことも。もう来なかったら、帰って来んと。

田 上： そやけど、兄ちゃん、あつ、弟なんか帰って行くんでしょ？

キサ子： 「あつ、姉ちゃん帰って来ん」ってそれで終わり。

児童ホーム入寮生の意識

森 　： 最後にじゃあ、ちょっと失礼かも知れないですけどね、児童ホームに行ったときに、海から来た子供たちと、陸にいる、こちらの人の子供が、海から来た児童ホームを、差別したり、いじめたり、そういうことはなかったですか。それは、別に特に引け目だとかは、なかったですか。同じ同世代で？

キサ子： それはなかったですよ。わたしらはなかったです。

田上 亘： やけど。

田 上： まあ、まあ、まあ、ちょっと待って。

キサ子： そやけど、やっぱりなんていうんですかね、児童ホームだから、そのあれ、「それに入っとるねえ」とか言って、施設、児童ホームだから、そのお母さんたちと一緒に、その住んでないからとかで、いわれたことはあるけど。そやけどですね、わたしはそういうことに対しては、自分はなんも思うたことないです。はい。

森　　： ああ、なるほどね。特にいじめがあったとか、そういうことはないですか。

キサ子： わたしはいじめられたことはないけえ。

森　　： 外のこちらのね、オカの人というか。同じ。

キサ子： それは、わたしはないです。わたしは。そら、そういうこと、人はいるかも知れんですね。だけ、そういう、そうやね。

田上亘： それはね、やっぱりね。ええ。あのね、自分らは、やっぱり意識はしとったですね、オカの人間は。うん、そのお前があれやけえ、なんかとかいうんではなくて、あ、あんたとABCのDの生活者やなっちゅうんは、意識はしとったですね。別に特別な意識ではないけど。あれさんは、あっこの人間やなっちゅうんな、で、来よる人やなっちゅうことは。それで、それ1つそういう自分らが意識しとるってことは、やっぱり、いじめも確かにあったと思うんですね。

キサ子： そういの、あったかも知れないけど、わたしはそんな目にはおうたことないから分からん。わたしはそれを、どういうんですかね。こういうの不幸に思ったこともないし、別になんとも思わなかったから。ただ、行って、呼んで帰れないときだけ、そういうことはあったけど（笑う）。なんていうんですかね、お母さんたちと一緒に住んでなかった、寂しいいうのは寂しかったかも知れないけど。それをこう、そういう方面のあれでは、別にわたし自体は、そういうふうには思ったことはないけど。やっぱり、そりゃ人によっちゃ、それを気にしとる人もいたかも知れません。

森　　： そうでしょうね。

キサ子： はい。

藤　川： あと、すいません。児童ホームで、どんなふうに、部屋、部屋っていうか、どんな

ふうに寝泊まりしてたんですか。なんていうか、部屋がたくさんあって。

キサ子： あ、はい、はい、はい。部屋はですね、例えば、小学校の1年から中学校の3年までおったら、そこのなんていうんですかね、中学3年ぐらいの子供は、おんなじ部屋で、えっと、何人部屋だったかな？3人か4人おって、ほいで、次は中学2年が何人ずつかで、その小分けして、そして、それが大体、あれ何十（畳の）部屋だったかどうか、けっこう。1、2。

田上實： おそらく、二段ベッドみたいにしとったんやない？

キサ子： いや、畳やったからですね。ほで、机があって。だから、どのぐらいやったろう、けっこう。ほで、荷物入れるところもちゃんとあって、そこにあれしてですね。

田　上： 机もあって、個々に。勉強机が？

近　石： 1部屋2人ですか、じゃあ。

キサ子： いえ。例えば、こういう広いところに。

近　石： ああ、そんな6畳とかじゃなくて、大一きな部屋？

キサ子： ええ。あれ何畳ぐらいあったかなあ。その中に。

田上亘： 小さいけえ、そのものすごく大きく感じるけど。

キサ子： いや、広かったよ。うん、それは。

田　上： 何人ぐらいで1部屋いたの？

キサ子： 1部屋がねえ。1、2、ふた、3人。中学生の人が2人と、それからあれと2人で、12畳ぐらいのところに10人ぐらいですかねえ。

田　上： じゃあ、布団をひ（敷）いて、毎日寝るときは？

キサ子： うん。ほで、お布団入れるところがあるから、そこにお布団入れて。ほで、机を全部、こうしてずらーっと並べてあるでしょう。だから、これを向こうのほうに寄せ

て。そして、そこにお布団ひ（敷）いて、
あっ、寮生活みたいなもんでしたね。

近 石： 12 畳に 10 人だったら狭いですね？
あっ、子供だからなあ。

キサ子： 子供だからね。ほで、そう大きくないから
ですね、みんな。だから、そのぐらい。

田上亘： どれぐらいあるんやろなあ。俺、友だち
おっても入ったことないけえ。

キサ子： ほして、今度、部屋でもなんちゅうの、
あれ。なんぼぐらいあったかな、女の子
で、えっと、1、2、3、3つか4つあった
ら、その狭いとこの部屋には、また、その
人数少なくして、大きいところには、とい
う状態でね。